

専業主婦だったから、自分の力で何かやってみたいと思っていた。夫も妻の思いはわかっていて。だから、シヨップには妻がやりたいと思っっていることはすべて取り入れた。

百合子さんにもシヨップのイメージができていた。百合子さんは米軍の座間と厚木基地にある将校の奥さんたちを相手にした店に入りしていた。日本のお土産がほしいという人たちが買いにくる。そこに着物や日本人形などを時々卸す友人の手伝いをしていた。そして、なんでこんないいものが捨てるように売られているのか。それをどうにかしたいという思いがあった。

シヨップのメイン事業は百合子さんの「私のおはこ」だが、利信さんも成果をあげつつある。たと



ふらっと店に入ってきた男性をつかまえた

えば、妻がいないときは自分が出展者やお客さんの相手をする。いろいろと話を聞いているうちに、主人に先立たれた、保険を迷っている、年金はもらえるだろうかとい

家業を継がなかった子どもたちが戻ってくるとき

「しえあ〜どぶれいす高井戸」では、最近、映画上映会を始めた。

きつかけは、店にふらっと入ってきた67歳の男性。家にいると、妻に「たまには外にいきなさいよ」と言われるらしい。よく話を聞いてみたら、大の映画ファンで、900本ものビデオを持っているという。それなら、うちで映画会をやりませんかと持ちかけたら、目が輝いた。

今まで5回ほど上映会を開催。筋金入りの映画ファンだけあって、一般にはあまり知られていない素晴らしい作品も上映してくれた。今ではシヨップの目玉企画となった。

出展者もお客さんも女性がほとんどだが、ときには男性も珍しうに覗くことがある。そんな男性客を利信さんは逃さない。「ご主人！」と呼びかけて店に招き入れ、説明し、麻雀やりませんか、パソコンやりませんかと話しかける。

いった話が出る。そんな人たちの相談にのることができる。

だから、無理はしないで少しずつやっていこうと思う。利信さんは「女房の背中を押したつもりだ

せっかく何かの技や趣味をもっているなら、それを使って活動してほしいからだ。

こうした店ではたぶんシニア男性は、女性よりも、同じ年代の男性から声をかけられるほうが気楽なのではないだろうか。女性は黙っていても、興味があれば入ってくる。だが、男性は躊躇しがちだ。だから、この店での利信さんの役割はご本人たちが感じているよりも大きい。

今後、男性の一人暮らしが増える。勤めている間は会社任せ、家では奥さん任せで、暮らしていく知恵と能力に欠けている人が多い。女性のように悩みを簡単には口にしないから、引きこもりにならないようなサポートが必要となる。利信さんは「なんでもいいから、気楽に入ってきてくれれば、私はその役目をできる」と話す。

「ここは小さな商店街で、昔は、

ったけど、私も妻に押されていたということなのかもしれないね」とつぶやいた。

■しえあ〜どぶれいす高井戸
<http://watashinochoko.com>

みごとに米屋、魚屋、八百屋が並んでいた。今では、それがほとんど消えました。でも、死んでいたスペースをうまく使えば、いろんなことができます。私たちも地域に存在感を示していきたい」。

シャッター商店街はこれから利用価値が出る。家業を継がなかった息子・娘たちが、定年後に実家に戻って、そこで活動すればいいのだ。元の店と同じことをやれとは言わない。今まで身につけた経験と知恵で、地域社会に役立つながら、自分も満足しながら、少しでも収入となる仕事をすればいいのだ。

「FP仲間の会合で、この店のことを発表したんです。そしたら、皆がFPという看板は出すなよ、よろず相談と書け」というんですよ（笑）。でも、みんな興味津々のがわかりました」。